永井路子

北条政子

文春文庫

北条政子

定価はカバーに表示してあります

1990年3月10日　第1刷
1992年9月10日　第3刷

著者　永井路子

発行者　新井信

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-720021-X

文庫

北条政子

永井路子

文藝春秋

北条政子／目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

あしおと　9
京みやげ　21
父と子　36
こがらしの館　47
夜の峠　71
からす天狗　86
月下兵鼓　102
白玉の……　124
海光る　147
炎　161
泣きぼくろ　194
芙蓉咲くとき　212
白い扇　227
朝のひぐらし　253

甲(かぶと)はじめ　274
灯の祭　298
野は嵐　315
見わたせば　345
黒い風の賦　366
京の舞姫　393
柳の庭　428
妄執の館　447
月　歌　479
花嫁の輿　506
小さきいのち　532
幻の船　543
修羅燃え　565
解説　清原康正　589

北条政子

あしおと

ながあめは今日も一日降りくらした。

が、今夜だけは、あきもせずくりかえされる単調な雨の歌に、じっと聞き耳をたてていなければならない。

もうすぐ――。

雨の音の底から、ひそかにしのびよる足音が伝わってくるはずなのだから……。

あしおと……。

そうだ。まぎれもなく男のあしおとだ。年ごろの娘なら誰でも覚えのあるそれが、おくればせながら、やっと政子のそばに近づきつつあるのだ。

もうすぐ？　そうしたらどうしよう。

政子は思わず体を固くしてしまう。ふいに胸苦しいまでの激しさで、乳房から、からだのしんにかけて、痛みに似たものが走った。あわてて、ほのぐらい灯から顔をそむけたとき、もうひとりの自分の少し意地悪なささやきを耳もとで聞いた。

――おばかさん。待ってるくせに……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

政子は頬をほてらせて、それに小さく答えるよりほかはない。

――そうなのよ。ほんとうは待っているのよ、それを。

待っていないと言ったらうそになるだろう。すでに二十一歳、処女は政子にとってそろそろ重荷になりかけている。

ふつう、十五、六になれば男に言いよられ、まもなく女は身ごもる。それなのに、とうとう政子は今日まで男を知らずにきてしまった。

顔立ちだって、さほどいいとはいえないが、まず人並みである。東女のつねとして肌の色こそ白くはなかったが、浅黒い皮膚の底から、ねっとりしみ出たつやがあった。なき母親ゆずりの眼は黒眼がちにすずやかで、野性の光をたたえている。

ただ口が、ちょっとばかり大きすぎるのが泣きどころで、無口な兄の三郎にさえ、

「そうだな、それだけしゃべるには、そのくらい大きくなければな」

などとからかわれたものだが、その兄だって、

「大きいけれど、それもご愛嬌だ。案外かわいげもあるしさ」

といってくれたではないか。

それに、北伊豆の北条といえば、ちっとは名の知れた土豪のひとり、多少の田畑、郎党も持っている。

こう並べると、嫁きおくれる原因はどこにもない。にもかかわらず、現実には政子はあきらかに嫁きおくれだった。むりにさがせば、年ごろになりかけたころ、母親が病気になり、末の弟の五郎を生んだあとの肥立ちが悪くてとうとうこの世を去ったこと、その直後に時政に大番役が廻って来て上洛してしまったことなどがあげられるかもしれない。大番役というのは、地方武士

たちが交替でつとめる都の警固役で、出かけたら三年はもどってこないのだ。母の看病から葬儀、そして父の出発後は、しぜん、政子は女あるじに代わって乳呑子の五郎の世話をする役をひきうけねばならなくなった。

が、そんなことは言いわけで、本人さえその気になれば、男にめぐりあう機会はいくらでもあった。じじつ、つけ文をされたり、道ですれちがって、いわくありげな流し目でみつめられたりしたことは度々あったのに、どういうわけか、それ以上に進まなかったし、そのことを格別くやしいとも思わなかったのがのんきすぎたのだろうか。

つまり、とりたてて理由もなく――というよりほかに言いようはないのである。いや、こんなふうに、なんの理由もなく、ずるずる機を逸するしまつの悪さこそ、いつの世にも変わらぬ嫁きおくれというものの特徴なのかもしれないが……。

それが、この春――。

久々にいわくありげな男の文が届けられた。思わず、ぼうっと瞼のうえがほのあからんでくるような気がして、

――まだ私には恋が残されている。

うっとりとしたとき、耳もとで侍女のさつきがささやいた。

「韮山のお館からですよ」

年は政子より二つ下、男のうわさをするのが大好きな彼女は、まるで自分が恋文をもらったように興奮していた。

「韮山のお館」

この地方では特別な響きを持つ言葉である。この北条とは狩野川を隔てた小高い丘陵の上に構

えられたその館には、平家の代官、山木兼隆が住んでいる。本来ならこの伊豆の国でいちばん権威のあるのは、三島にある国府の役人たちのはずなのだが、伊豆にある平家の所領の管理にやって来たというこの山木兼隆は、今をときめくその平家の一門だというふれこみなので、土地の人々は別格あつかいなのである。

「まあ、この筆のあと、紙の色。ごらんなさいませ、このへんの地侍とはまるで違います」

手紙をのぞきこんでいたさつきは声を上ずらせた。そういわれれば、

ぜひ一目逢瀬を。お話したいことがあるのです。

御承諾なら裏の楓の木に御返事を……

無記名の、ごくありきたりの文句さえも、ひどく優雅なものに思われた。

「韮山のお館のどなたでしょう？　あそこには都からいらした公達がたくさんいらっしゃるから……」

さつきは目を輝かせてそう言い、しつこく政子に返事をうながした。

短い政子の手紙に返事が来るより前に、さつきは早くも文使いの男と親しくなって、

「むこうではとてもお喜びですって」

早速様子をしらせてきた。その日以来さつきは妙にうきうきし、韮山と政子との交渉は、すべて彼女を通して行われるようになった。

そのさつきが、

「今夜あたり……」

思わせぶりな耳うちをしたのが昨日の朝だった。

いよいよ「韮山の公達」が、その名を告げる日がやってきたのである。

単調な雨脚にまじって、
ひた、ひた、ひた……。
政子の耳があきらかに人の足音を聞きわけたのは、亥の刻（午後十時）すぎだった。そしてその瞬間、政子は思わず目をつぶって、床の近くの燭を吹き消していた。
直前まで、灯を消すつもりはなかった。
はじめて見るそのひとを、ほのぐらい灯の下でじっとみつめ、やがて静かにほほえみかけて、身をなげだして激しく唇を求める――そんな恥しらずな空想が奔放にひろがっていたのに、いざとなると、処女というものは、こんなにいくじのないものか……。
だらしなく、からだがふるえる。
ひた、ひた、ひた……。
足音はさらに迫ってきた。
――どうぞ誰にも気づかれませんように。
大番で父がいないのはありがたかったが、こんなにはっきりした足音では、兄や弟妹や郎従たちみんなにわかってしまわないか。
そのとき、とつぜん。
けーん。
裏山で、山犬とも狐ともつかぬ鳴声がした。あっ、と息をのんだ瞬間、足音はぴたりとまり、雨脚は急にはげしさを加えたのであったが……。
ふしぎなことに、これをしおに足音はぷっつりとだえてしまった。いくら耳をすましても、なにひとつ聞こえはしない。ひどく長いような短いような不安と焦燥の時間がすぎたあと、政子の

耳は思いがけないものを聞いたのである。

女のかすかなうめき声だ。

いやおうなしに、すぐ声のありかは知れた。かすかに灯のもれる侍女のさつきの臥所――。まぎれもなく、そこから、すすり泣きともつかぬうめき声は洩れていたのである。

それが何かを知らないほど政子は稚くない。思わず背筋がぴくりとふるえた瞬間、政子は足音の聞こえなくなった理由を知った。

――足音は行ってしまったのだ。さつきの所へ……

ぱあっとからだじゅうの血が燃えあがるような気がして、乳房をおさえたなり、政子はその場に突伏していた。

翌日もながあめは降りやまなかった。

思いきり悪く軒端にすがっていた白いしずくが、ある瞬間、決心をつけたとでもいうように、きらりと身をくねらせて飛びおりると、続いて、た、た、たと足早に仲間が続き、暫くすると、またためらいをくりかえす。そんな光景も、濡れそぼちた山吹が、時おり重たげに葉先をゆする庭のたたずまいも、まったく昨夜そのままだ。

政子はじっと、それを見ている。

それよりほかに眼のやりばがないからだ。

もし、予想していた通りに事が運んだら、このものうげな風景も、まるきり違った色どりをもって、その眼に映るはずだったのに。

心中べそをかく思いでもある。いやじつをいえばそんななまやさしいものではないのだ。

――私だって、あの雨だれのように、軒端から飛びおりる決心をつけていたのに……

それなのに、残念ながら、政子は昨日のまま、依然として嫁きおくれの娘であることに変わりはないのである。

昼ちかくなって、さつきが、おそるおそるやってきた。

「姫さま……。申しわけもございません」

何をいまさら図々しい。

返事もしないでいると、

「それが、姫さま。いろいろ訳がございまして……じつは、はじめからお話しませんといけませんのですが」

くどくどとさつきは弁解がましく並べたてた。耳はかさないつもりだったが、そのうち、

「いえ、私も、ほんとうのところ、ゆうべ使いの者にはじめて聞いたんでございますけれど……」

という言葉がふと政子の耳にひっかかった。

「え、何ですって、使いが？」

「は、はい……ゆうべ、来まして……」

頬をあからめてどもるさつきのその言葉を聞いたとき、すとんと体の中から力がぬけてしまった。

なんだ、そうだったのか。つまりあの足音は、はじめからさつきの所へしのんでゆく男のものだったのだ。

――それをひとり相撲していた私……。ふるえたり、胸をとどろかせたり、ひっくり返ったりしたことを思い出すと、耳の奥がカーンとなるほど恥ずかしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton